

生活社会科学科とは

―設置の経緯、概要および特色―

梶 山 孝 金

1. はじめに

本学は、平成3年4月、人間の生活を社会状況との関連において社会科学的に研究教育する新しい学科、「生活社会科学科」を開設した。初年度は認可の関係で募集が出遅れたにもかかわらず、1,115名という多数の志願者があり、この中から推薦および試験による選抜の結果、346名の意欲に溢れた第1期生を迎え、順調なスタートを切ることができた。

以下では、この新しい生活社会科学科について、設置の経緯、概要および特色を中心に紹介する。

2. 生活社会科学科設置の経緯

(1) 本学家政学部の変容

本学の家政学部は、昭和24年開設以来、家庭内における生活技術の追究と、食と衣を中心とする科学的研究の蓄積による家政学の構築を目指し、食物学科と被服学科の2学科で構成、運営されてきた。しかし、開設以来40年余りの間に、家政学がその研究教育の対象とする人間の生活も、それをとりまく社会状況も大きく変化した。この間、卒業生も、教員や栄養士など専門職に就いたり大学院に進学する一部の者を除くと、大部分が製造業、商業、金融保険、サービス業など一般企業に就職して活躍しており、従来の家政学部の教育内容だけでは対応できない状況に変容してきた。これらにより、本学の家政学部では、時代の変化と新しい社会のニーズに対応するために抜本的改革が迫られているものと認識した。

(2) 女性の社会進出

昭和61(1986)年に制定された「男女雇用機会均等法」などの影響もあり、最近では女子学生に対する産業界の広い分野から多くの求人がくるようになり、また女性も自ら進んで社会に進出して活躍したいという意欲を強く持つような傾向になっている。本学が昭和63年に行った東海三県下の女子高校生等への意識調査(調査:電通)の結果からも、このことは裏付けられた。そこで本学の家政学部も、こうした女性意識の変化にも対応できるような教育内容を持つ新しい学部・学科への再編成が要請されていると判断した。

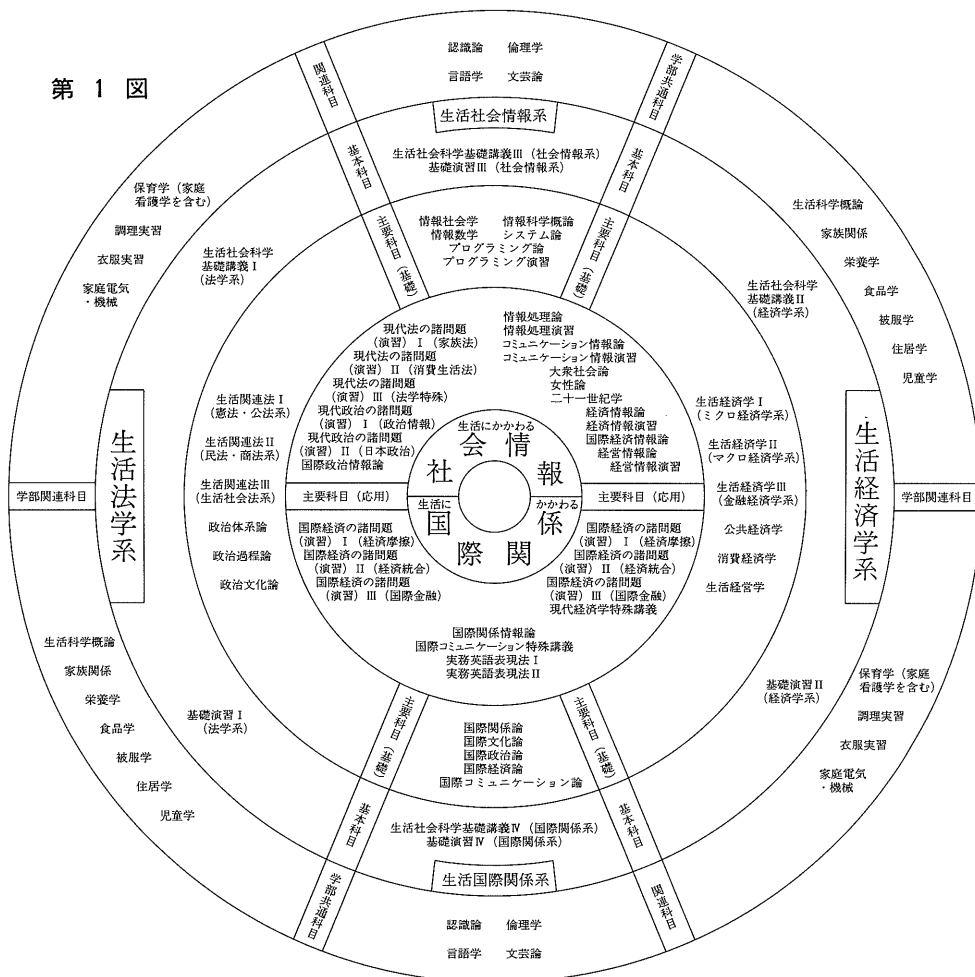
(3) 学部再編成の一環としての生活社会科学科の増設

以上の認識の下に、①従来の食物学科を、その研究教育内容をより明確にするために「食品栄養学科」に名称変更し、②被服学科を、住居関係を含む人間生活の身近な環境を総合的に研究教育する「生活環境学科」に変更し、③さらに以上2学科だけではカバーしきれ

ない人間の生活そのものと生活を取りまく社会事象との関連性を社会科学적으로とらえる新しい学科として、「生活社会科学科」を増設することにしたのである。

3. 生活社会科学科の概要

第 1 図



第1図は、専門授業科目の配置構想に基づいて、生活社会科学科の全体像を図式化したものである。本学の生活社会科学科には、「生活にかかわる社会情報」と「生活にかかわる国際関係」という2つの基本テーマが設定されている。この2つのテーマを核に、I法学系（政治学を含む）、II経済学系（経営学を含む）、III社会情報系、IV国際関係系、の4つの学問系列＝「学系」が取り囲み、それぞれが基本科目、主要科目（基礎）、主要科目（応用）とシステムティックに配置され、さらにそれらの周辺

には、生活科学概論、家族関係等の学部共通科目、認識論、言語学等の関連科目、保育学、家庭電気・機械等の学部関連科目が有機的に配置されたユニークな構想となっている。

4. 生活社会科学科の特色

(1) 時代の動向をとらえた2つのテーマ

第1のテーマは、「生活にかかわる社会情報」である。ここではA1（人工知能）など知情報科学の最先端の研究を見通しながら、生活にかかわる様々な社会情報を法律、政治、経済、国際関係などの現実的な社会現象との関連において社会科学的に分析・解釈する新しい分野を開拓していく。特に女性は、家庭という小さな生活単位から職場、地域、国際社会という大きな生活領域まで幅広く関わりを持つので、氾濫する社会情報を的確に収集処理し、判断する能力を養うことが必要となってくる。本学科では、時代の要請に対応し、情報化の進んだ現代社会において、高度な技術と対応力を身につけ、社会情報を社会科学的にトータルな視点でとらえることができる人材の育成を期している。

第2のテーマは、「生活にかかわる国際関係」である。国際化とは、モノ・カネ・情報（技術を含む）・ヒト及びこれらの総体としての文化などが国境を越えて激しく往来するようになることである。国と国、都市と都市、地域と地域の時間距離がますます短くなる。特に、中部経済圏には、トヨタ自動車をはじめとする国際的に活躍する企業がひしめいており、世界をリードするハイテク産業が開拓されつつある。また、中部国際新空港の計画もすめられ、愛知県は21世紀初頭の万国博覧会の候補地にも決定されるなど、国際化の進展とそれへの対応は地域からの強い要請でもある。本学科では、これらの要請に対応し、人間の生活にかかわる法学、政治学、あるいは経済学、国際関係論など社会科学に精通し、国際感覚豊かで、語学力をいかして国際舞台で活躍できる有為な人材の養成を期している。

(2) 「テーマ」と「学系」を巧みに組み合わせた4つの履修コース

本学科に入ってくる学生は、まず1年次では幅広く一般教養を学び語学力を鍛えけるとともに、被服学、食品学、住居学など生活に直接かわる学部共通科目を学習する。2年次には、前述の2つのテーマのいずれか一方を選択し、その当該学系（「社会情報」系または「国際関係」系）に、法学系（政治学を含む）または経済学系（経営学を含む）のいずれかを組み合わせた4つの履修コース（学則では弾力的に運用できるように「履修例」と表示）から自分に最も適したコースを選択し、それぞれについて学問の基礎と研究手法の基本を学ぶ。そして3、4年次には、主要科目として各テーマを細分化し、基礎領域から応用領域へとより深く専門的に学び、最後に個別の研究課題についての成果を卒業論文（必修）として完成させる。履修コースの枠をこえて他の領域の講義も聴ける「自由科目」の採用によって、グローバルな視野が拓けるように配慮している。

(3) “即戦力”をめざした実践的カリキュラム

本学科では、「社会情報」コースを選択した場合は、情報科学概論、プログラミング論および同演習、情報処理論および同演習などの情報科学・情報処理教育を実践的に行い、「国

際関係」コースを選択した場合は、国際関係論、国際政治論、国際経済論などのほか、政治・経済などに関する時事英語が中心の「実務英語表現法Ⅰ」や、商業英語およびビジネス英会話が中心の「実務英語表現法Ⅱ」など、時代にマッチした国際教育と実務英語教育を行い、それぞれに“即戦力”として実社会で役立つような実践的なカリキュラムを用意している。

（４）国際派の多い優秀な教授陣

本学科には、国際学会で活躍している人、外国の大学で教壇に立っていた人、外国で博士号をとってきた人、長期海外留学の経験者など国際派が多く、秀れた研究実績を持つ人ばかりが集まっている。“教育は人なり”という。本学科の最大の特色は、優秀な教授陣にある。

５．おわりに

大学には、変わってはならないものと変わらなければならないものがある。建学の精神であるとか、学問研究の尊重、自由な気風とか批判精神といった大学独自の伝統や風土のようなものは、変わってはならないものである。しかし大学は、学術研究の場であるとともに、高等教育というサービスの生産者＝供給者でもある。後者としての大学は、時代の変化に対応して変わっていかなければならない。本学も、女子大学として、顧客＝消費者たる女性の新たな可能性を拓き、以てその需要に応えようと努力している。それは、私立大学のひとつとして、来るべき“冬の時代”を生き抜くための努力でもある。本学の家政学部の生活科学部への改組転換とその一環としての生活社会科学科の設置は、そうした努力の結果の一部である。社会の急激な情報化・国際化への進展は、今後ますます加速化され、われわれに一層の改変を迫るであろうが、一方、情報化・国際化の時代は知力がものをいう時代であり、その意味で女性に有利な時代になっていくと思われる。女性にはぜひ頑張ってもらいたいし、われわれも勇気と自信を以てこれに対応して行きたいと思う。